# 天使の苦悩

歯車兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
天使の苦悩

【Ｎコード】
Ｎ３１９２Ｚ

【作者名】
歯車兎

【あらすじ】
お前も色々大変だな。でも一言いわせてくれ。このドＳめ。

**（前書き）**

また勢いで描いたのでグダグダです。

あれから一週間たった。俺は攫った人間達をニコルの上司に引き渡しに行き、その帰り特にやることもなかったので成功の報告という事を言い訳にニコルの屋敷へ行く事にした。

ニコル一族は昔からこの土地にいる爵位を持つ一族だ。そしてその時からニコルの一族は裏で色々とやっていたのだ。そのおかげでニコルが彼の父親から譲り受けた遺産は莫大だ。大きな土地、一生でも使いきれないほどの金、人、名誉、何もかもそろっている。その代りプレッシャーが恐ろしく多いと彼は言っていた。

俺がニコルに初めて出会ったのは俺が１８歳、ニコルが１１歳の時だ。

俺はその時すでに上層部に拾われていたのでニコルの父親の命令で屋敷に訪れていた。そこで紹介されたのがニコルだった。屋敷で大切に大切に育てられたニコルは父親の後ろで不安げに、しかし背筋をしゃんと伸ばし俺を見上げていたのを覚えている。

うん、昔のニコルは可愛かった。

「申し訳ございません、唯今主人は留守にしております。」

なんだと。

ニコルの屋敷についたはいいが玄関で門前払いに去れてしまった。何故だ、俺は何時でもこの屋敷に入って良いようになっている筈なのに。

さてはまた新人か。そういえば、最近ニコルの犬は新入りが多い。この前連れて来ていたのも俺は見たことなかったし、あいつ等も俺を知らないようだった。だがニコルはよっぽどの事がない限り「名

前」を付けた犬を手放したりしないはずだ。彼は一見酷く扱っているようで犬達を大切にしているのだから。
　とりあえず、だ。このまま屋敷の前に居ても俺は面白くもなんともない。せめて俺を知ってる犬が来てくれれば良いんだが。この前の生意気な犬達でも良い。えぇと、名前は何と言ったっけ。

「キット早く来いよ、もうすぐご主人様（マスター）が帰ってくるぞ。」
「そうだ、キットだ。あともう一匹がバディだったかな。」
「おわ、誰だてめぇ！それと俺はパトリックだ！」

　考えてる答えが聞こえたのでそう言えばそうだったとスッキリしたところで背後に人の気配が。
　おぉ、この前の犬達じゃないか。驚きつつ睨みつつ自分から名乗ってくれたパトリックと後ろで無言の刺さる視線を向けてくる茶髪。キットだから…クリストファーか？この前もニコルにすら小声で話していたし、シャイなのか、物凄く無口なのか。まぁどっちでもいいが。

「…あんたか。」
「やぁ、ニコルは？」
「…留守だ。」
「何故？」
「新しい犬を引き取ってくる。」
「最近新顔が多いな、フレデリックやリチャードはどうした。ニコルが連れているのか？」
「…死んだ。」
「……そうか。」

　パトリックがやや苦い顔で答える。
　フレデリックとリチャードはニコルの父親がニコルに引き渡した

一番最初の犬だ。二匹は何時でもニコルの傍にいたしニコルも二匹を好んで連れていた。…そうか、…死んだのか。さぞショックだっただろう。

「ニコルは何時頃戻る？」
「あと5分もすれば。」
「よし、屋敷に入れろ。」
「はぁ！？」

パトリックが驚いた声を上げる。クリストファーもえ、何いってんのコイツ的な視線を向けてくる。失礼な連中め。友達が友人の家を訪ねて何が悪い。しかも俺は許可だってもらってるんだ。

「文句あるのか。」
「……。」

ないよな。文句なんて言える訳がないのに聞く俺はサドなのか、いや、そんなことないぞ俺はノーマルだ。そういえばニコルは何時からああドSになったんだ。昔はそうでもなかっ……いや、今思い返せば昔からその気があったような気がする。

「ニコルは本当に躾が下手だな」
「…っ！」

キッと睨んでくるパトリック。怖いくないぞ、生意気なのも好きだ。まぁ俺的にはクリストファーの方が好みだが。無口なところとか。…うん、ほんとに視線だけで何も喋らないな。

「人ン家の前でなにやってんだごら」

一瞬心臓が凍った。
何故ならニコルの何時もの弾んだ感じはまったく感じ取れない低い不機嫌を包み隠さない声だったからだ。俺達三人は恐る恐る振り返る。そこにはとびっきりイイ笑顔のニコルがいた。ちょ、ま、何故そんなに不機嫌なんだ。怖い。

「お、おかえりニコル。」
「ただいまアルフレッド。ちょっとそこ邪魔なんだよね、退け。」
笑顔なのに怖い。何時もの事か。でもこれは近年稀にみる機嫌の悪さだ。ニコルが愛称じゃなくちゃんと名前で呼ぶときは物凄く機嫌の悪い時か物凄く機嫌のいい時のどちらかだ。今は前者。

「あ、やっぱアルフレッド入って。」

ニコルは俺を退けて扉を開けると俺の腕を掴みひっぱった。そして手で軽く後ろにいる二匹にも入るように命じる。
少し久しく感じる屋敷は何も変わっていないように見えるが、どこか変わった。そう、内装とかではなく雰囲気が。いったい何が変わったのか。まぁこの凍りつくような空気は主にニコルから発せられているが。ニコルはその華奢な腕で俺の腕をグイグイひきながら階段を上がり自分の書斎に入る。二匹には外で待つように言っていた。

「恐ろしく機嫌が悪いな。何があった。」
「…上が、……犬を1匹引き渡すようにと。その代り今日新しいのを貰って来た。」
「たったそれだけか？」
「…引き渡したのはバートなんだ。」
「……。」

ベルトラムはニコルが初めて躾けた犬。しかし、このまえのナサニエル達や今日聞いたフレデリック達と言い、死んだ、失った犬は失ってニコルが苦しむような犬ばかりじゃないか。上に引き取られたからにはベルトラム(パート)も生きては帰ってこないだろう。

あぁ、そうか、さっき感じた違和感はコレか。新顔しかいないんだ。今この屋敷には。

ニコルは自分の椅子に腰かけると机に膝をつき手のひらを組み合わせ、祈るように額に手を付けた。

上は若く、家柄も身分も腕もカリスマ性もあるニコルをねたんでいる。このニコルの犬を奪うというのは上の嫌がらせだ。

「新顔は何時くるんだ。」

「あと10分程だよ。なんでも上が捕まえたらしいんだけど凶暴でね、手に負えないんだってさ。笑っちゃうよ。」

ふぅと大きくため息をつき、顔をあげたニコルは何時もの笑顔に戻っていた。それが少し痛々しかった。こんな世界だと死というのはとてもつまらない事だ。それを覚悟してこの世界に俺達は居る。

「さて、パット！キット！」

「はいご主人様(マスター)」

ニコルが外に呼びかける。するとすぐにパトリックとクリストファーが入ってきた。ん、よくよく見ればパトリックって若いんだな、生意気なところは若さゆえか。クリストファーは俺と同い年くらいか、ちょっと下くらいか。ニコルよりは上だな。

「もうすぐ新顔が来るよ。キット、紅茶三つ持ってきて。パット、もうわかるね？」
「はいご主人様（マスター）。では失礼します。」

パットとキットは丁寧にお辞儀して出て行った。

「なぁ、ニコル？」
「なぁに？」
「なんでキットは喋らないんだ？」

ニコルはニィと口を三日月の形にするとそれはねー、と教えてくれた。なんでもパットの首輪の様に電流が流れる仕掛けらしい。だがそれはパットの首輪の様にスイッチ式ではなく、声帯の振動で電流が流れるらしい。要するに声を上げると電流が流れる仕組みの様だ。しかし一定の大きさまでなら声を出してもいいらしく、ニコルにまで小声で話すのはそうゆう理由だそうだ。まったく何を趣味で作ってるんだが。

「しかもね、キットったら痛い事にも気持ちいい事にも弱いからすぐ声出しちゃうんだよね。気持ちいことして声出してビリッときてそれで痛くなって声出しちゃってまた痛くって、っていうループが面白いんだ。最終的に痛いのも気持ちいいのも分かんないくらいグチャグチャになるのがすっごい僕好みなんだよね。そもそも気持ちいいのとか声抑えるの難しいじゃん。ホラ僕の犬ってマゾ多いからさ、すぐ盛っちゃって、でも最終的には何かもどうでも良くなるくらいヨくしてあげるあたり僕優しいよね。」
「どこからつっこめばいいんだ…。」

突っ込みどころが多すぎて収集付かないんだが。ちょっと言わせてもらうとマゾなのはお前が躾けたからだあって皆が皆元からマゾ

だったわけでは無いと思う。てゆうか、このドＳめ。うん、これでいいな。言わないけど。

「あとパットに何を用意させた？」
「ふふっ、内緒」

嫌な予感しかしない。
そんな話をしているうちにキットが書斎に入ってきた。アールグレイのいい香りがする。お茶うけにビスケットっていうのはニコルにしえは少し庶民的だと思うが、まぁ実際美味しいしな。どうせそのビスケットだって高いんだ。

「ありがとうキット。よし、じゃ、アルフィー来て手伝って。」
「何を。」
「腕力が必要なの。」

「おい！離せ！この手錠外せよ！聞いてんのかクソ野郎共！クソッ…なんで俺がこんなめに…ッ！」

玄関に運び込まれたのは目隠しと腕に手錠をかけられた威勢の良い赤毛の男だった。服装は白いＹシャツに黒いズボン。これで目隠しと手錠さえなかったら随分と男前だろうに。それにしても威勢がいいな。ニコルの好きそうなタイプだ。少しベルトラムに似ている。…気がする。
両腕を上の使いにつかまれたまま暴れる姿はまだこちらの空気をあまり吸っていないのだと容易に理解できた。

「随分と威勢の良いこと。ご苦労様です、あとは僕がやっとくね。」
「いえ、しかし、ニコラス殿もなかなかおかしな趣味をしていらっしゃる。廃棄処分になりかけのゴミを引き取るとは。では、私達はコレで。」

上からの使いの奴らが車に乗り、随分と遠くに行ったのを確認してからニコルは男に近づいた。そして優しく頭を撫でる。男は突然触れられてビクッと大げさに肩を揺らし自由になっている足でその場から移動した。しかし目が見えていないので途中でスっ転んだが。

「だ、誰だ、俺に触るな！俺は人間だ！物でも動物でもない！」
「お前は犬だよ。」

さも愉快そうな口調とは裏腹にニコルの表情は曇っていた。ニコルは小さく手で俺を招くと自分の太ももとと首の後ろを指差した。あぁ、なるほど。そういう事か。

俺はスっ転んだままギャンギャン吠える男に近寄り組み伏せる。男は抵抗するものの腕が自由にならないし視覚も奪われているためロクな抵抗はできていない。

「暴れないでよ、何、痛くされるのが好きなの？変態。」

ニコルは遠慮なく男を罵りながら男のシャツをひんむく。男はうつ伏せになって背中に俺が乗って押さえつけている形になるのでニコルは首元のシャツを肩までずらしただけなのだが。するとそこにはお目当てのものがあったようで、ニコルは貼り付けられているそれめがけて思い切り踏みつけた。勿論男は痛みで叫んだ。ニコルが足を退けるとそこには潰れた盗聴器があった。

「あぁ、もう暴れないでってば。」

そしてニコルは男の脚側に回ると太もも辺りを探り始めた。こんなところに仕込むあたり上の連中もよっぽど暇なのか欲求不満なのか。

ニコルはまた探し当てたようでそこも遠慮なくグリグリと踏みつける。因みにグリグリしたのはわざと上の連中の耳を潰すためだ。

すべての盗聴器を壊したことを確認してニコルは俺をどんと蹴飛ばした。痛い。何をするんだと非難の視線をニコルに向けるがニコルはそんなものお構いなしにうつぶせのままの男に抱きついた。男の背に顔を埋めシャツをクシャクシャに握る。男はまだ悪態をついていたがやがて驚いたような声を上げた。

ニコルが泣いていたのだ。これには俺も驚いた。だがそれ以上に男は驚いていた。声を押し殺しながらも肩を揺らしニコルは泣いている。男はどうしていいのか分からないようでしばらく固まっていたがやがて口を開いた。

「アンタが誰かはしらねェけど、なんでアンタが泣いてんだ。アンタは俺を買ったんだろ。まるでモノみたいに」

「うるさいよ。」

「やっぱ泣いてんじゃねぇか。」

「泣いてないってば。」

ニコルは男の背から降り床にへたりと座りながら袖で涙をぬぐった。男は自力で仰向けになり腹筋を使って起き上がると不自由な手を使って目隠しを自分ではずし辺りを見回した。やっぱり男前った。そしてやっぱりベクトラムに少し似ていた。そして自分のすぐ隣でまだグズグズ言っているニコルに近寄った。

「なんだ、やっぱ泣いてやがる。しかもガキだ。」

男はやはり不自由な手でニコルの頬の涙をぬぐった。なんだこの男前。自分の状況を理解していない馬鹿なのか、それとも理解しているがお人よしな馬鹿なのか。
ニコルはキッと男を睨むとまた抱きついた。今度はちゃんとハグのような形だ。

「今は、全部に耐えるの。良い？全部。僕の所に居る事もこの世界にいる事も、耐えて耐えて、そして何時か、上を一緒にぶっ潰そう。」

男の頭を撫でながら、優しく、しかしニコル自身はポロポロと涙を流しながらニコルは言った。男は動かず喋らなかった。

ニコルは男の手錠を外すとその代りに首輪を付けた。ニコルはにっこりと笑い

「僕が君のご主人様。ＯＫ？」
「……あぁ」
「君の名前は？」
「……ハンス。」

ニコルは眉をしかめえて、しかし愉快そうに言った。

「ハンス？似合わないね、じゃあ僕が名前付けてあげる。うーん…、じゃあ、生意気だからブラッドリーね、よろしくブラッド。」
「……。」

ブラッドをふいとそっぽを向いた。

「…そろそろ良いか。いい加減俺も暇だ。」

「そうだね、じゃあお茶でも飲もうか。おいでブラッド。」

ニコルは俺とブラッドの腕をグイグイとひき書斎へと上がっていった。屋敷に少し活気戻った。

～おまけ～

ブラッドリーは与えられた自分の部屋でもう休んでいる。ほかの犬達もだ。そんな中、まだ書斎にいる俺はニコルに尋ねた。

「パットに用意させたのってなんだったんだ？」

「あぁ、えっとね、まず部屋のよういでしょ？服でしょ？あと僕からのプレゼント。」

「プレゼント？」

「…気になる？」

「気になる」

「じゃあ内緒。」

この性悪め！

結局教えてくれなかった。俺はニコルの屋敷に泊まり、次の朝起きてきたブラッドに挨拶をすると昨日までは無かった銀のピアスが

彼の耳でキラリと光った。

**（後書き）**

因みにパットへのプレゼントは銀のネックレス。キットは指輪です。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3192z/

---

天使の苦悩

2011年12月11日02時58分発行